

来年は「明治 150 年」・・・明治のうきはを偲ぶ(第2回)



平成 30 年(2018 年)は、明治元年(1868 年)から起算して満 150 年に当たります。
この機会に、うきはの明治に関わる人物・出来事などを紹介しています。

明治時代、吉井は大石・長野水道の恩恵により穀倉地帯の
中心として、商家立ち並ぶ在郷町ざいこうまちとして繁栄しました。

(写真＝明治期、祇園神社前の南新川)



一文豪夏目漱石が詠んだ明治の吉井

小説「吾輩は猫である」などの作品で知られる夏目漱石なつめ そうせき(1867-1916)は、
熊本の第五高等学校英語教諭時代の明治 32 年 1 月 6 日、日田から筑後川を
下り千年の渡し場から吉井に入り、札ノ辻辺りに泊まったと言われています。
漱石は、当時の吉井ののどかな情景が偲ばれる俳句 2 句を詠んでいます。



「新道は 一直線の 寒さ哉」 かな

千年の渡し場ちとせに着いた漱石は正月の寒さのなか人力車に乗り、
千年の溝口、能楽と抜け吉井の町中に向かったと言われています。
(写真＝漱石が人力車で通ったとされる千年地区)



「なつかしむ 衾ふすまに聞くや 馬の鈴」

馬の絵が描かれた宿屋の衾ふすま(掛け布団)を目にした漱石が、
その時の心情を詠んだと言われています。
(写真＝漱石が泊まったとされる宿屋があった札の辻付近)

「夏目漱石うきは市足跡句碑」、「稲畑廣太郎句碑」除幕式

うきは市ふるさと創生個性あるまちづくり事業を活用して、俳句の創作活動を行うやまたろ
句会により句碑が建立されるに当たり、ホトトギス名誉主宰の稲畑汀子氏も臨席され、除幕式
が開催されます。郷土の昔を偲ぶ、また、俳句に親しむ機会として、お越しく下さい。

※稲畑汀子氏いなはたていこ、廣太郎氏こうたろう・・・明治時代、俳誌「ホトトギス」を主宰した俳人・高浜虚子たかはまきよしの孫、曾孫ひ

12 月 11 日(月) 午前 9 時から 「夏目漱石の足跡記念句碑」(白壁交流広場)、
午前 9 時 40 分から (予定)「稲畑廣太郎句碑」(吉井町小学校前句碑通り)